九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

[1]九州大学韓国研究センターNews Letter

https://hdl.handle.net/2324/2004986

出版情報：九州大学韓国研究センターNews Letter. 1, pp.1-, 2001-03-20. Research Center for Korean Studies, Kyushu University
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

NEWS LETTER

뉴스레터
창간호
2001 vol. 1

ご挨拶
センター紹介
九大総理工・プサン大学・ポハン理工科大学の三校セミナー
日韓シンポジウムを終えて
近著紹介
12年度の活動報告
寄贈図書一覧
Information

九州大学韓国研究センター
The Research Center for Korean Studies

NEWS LETTER

뉴스레터

창간호
2001 vol. 1

C O N T E N T S

ご挨拶……3
九州大学総長／杉岡 洋一
九州大学韓国研究センター所長／石川 捷治

センター紹介……4

開所式……5

TOPICS 1
日韓の三校セミナー（CSS）……6
九大総理工・プサン大学・ポハン理工科大学
による大学院教育の国際化の新しい試み
九州大学院総合理工学研究院教授／村岡 克紀

TOPICS 2
日韓シンポジウム……8
「韓国伝統文化と九州」
九州大学大学院人文科学研究院助教授／六反田 豊

近著紹介……9
『旧韓国の教育と日本人』
稲葉 継雄著

12年度の活動報告……10

寄贈図書一覧……11

Information

■表紙説明：韓半島のサテライト写真

「九州大学韓国研究センター」は、韓国に関する研究と教育を推進し、九州大学と韓国との学術・文化交流の拠点となる施設として、九州大学が設置したものです。この建物は、鉄骨造（プレハブ）2階建てで建物面積108.54平方メートル、延べ面積217.08平方メートルです。建物のイメージとしては、韓国旗を象徴する赤や青など韓国的な色使いで外装を施し、さらに、韓国の伝統的な文様を表現した窓格子等を取り入れたデザインとしています。

大韓民国の金鍾泌（Kim Jong-Pil）元国務総理の筆による「九州大学韓国研究センター」と書かれた木製の扁額がセンター内に掲げられました。開所式当日には韓国国際交流財団の金在珪（Kim Jae-Kyu）理事と杉岡洋一九州大学総長が除幕を行いました。

ご挨拶

규슈대학(九州大學)은 창설이래 학문적으로 아시아에 눈을 돌려, "아시아에서 세계로"라는 다양한 연구로써 각국의 연구교육의 진전에 협력하며, 과거, 현재, 그리고 미래를 향해 아시아의 중핵적인 연구교육의 기점으로서의 역할을 담당해 왔습니다.

1998년 11월 30일에 대한민국 김 종필(金鍾泌)국무총리가 본교에서 「한일관계의 과거와 미래」라고 하는 제목으로 강연하시고, 본교 에서는명예박사의 칭호를 수여하였습니다.

김 총리는 일본과 한국의 새로운 우호관계의 확립에 대한 필요성을 강조하시고, 특히 미래의 일·한관계의 담당자인 일본의 젊은 사람들에 대한 기대와 역할을 학생들에게 논하셔서 깊은 감명을 주셨습니다. 더구나 본교가 개교이래, 아시아에 개방된 학교로서 쌓아온 한국에 관련된 연구교육의 업적을 높이 평가하시고, 보다 나은 발전을 기대하는 취지를 표명하셨습니다.

이것을 계기로 한국국제교류재단은 본교를 일본 내에서의 한국연구의 거점이라는 위치를 구축하고, 한국연구의 조성을 행하게 되었습니다.

이에 따라 본교는 한국에 관련된 연구교육을 추진하고, 규슈대학(九州大學)과 대한민국과의 학술·문화교류의 거점이 될 시설로서 「규슈대학 한국연구센터」를 설치한 것입니다.

본 센터는 일본의 국립대학으로서는 처음으로 설치되는 시설이며, 본교뿐만 아니라 일본의 한국연구 및 일·한의 학술 ·문화교류의 거점으로서 발전하기를 기대합니다.

九州大学総長
杉岡　洋一

九州大学は、創設期よりアジアに学問的に目を向け、そしてアジアから世界へと多様な研究により各国の研究教育の進展に協力し、過去、現在そして未来に向けてアジアの中核的研究教育拠点としての役割を担ってきました。

平成10年（1998）11月30日に、大韓民国金鍾泌国務総理が本学において「韓日関係の過去と未来」と題して講演され、本学は、名誉博士の称号を授与しました。

金総理は、日韓の新しい友好関係確立の必要性を強調され、特に、未来の日韓関係の担い手である日本の若い人々への期待と役割を学生諸君へ語りかけられ、深い感銘を与えられました。さらに、本学が開学以来、アジアに開かれた大学として積み重ねてきた韓国に係る研究教育の業績を高く評価され、より一層の発展を期待する旨、表明されました。

これを契機として、韓国国際交流財団は、本学を我が国における韓国研究の拠点と位置づけ、韓国研究の助成を行うこととなりました。

これに応え、本学は、韓国に係る研究教育を推進し、九州大学と大韓民国との学術・文化交流の拠点となる施設として「九州大学韓国研究センター」を設置したものであります。

本センターは、日本の国立大学としては初めて設置される施設であり、本学のみならず、日本の韓国研究及び日韓の学術・文化交流の拠点として発展することを期待します。

규슈대학(九州大學) 한국연구센터의 건물은, 신축 캠퍼스로 옮기기 이전으로, 본격적인 건물을 지을 수 없다는 사정관계상, 2층 건물의 작은 규모입니다. 그러나, 건물은 작지만, 꿈은 크게, 본 센터는 새로운 시대의 연구센터를 지향하고 싶습니다.

첫째, 차세대의 연구센터로서, 연구원이 연구실에 틀어박혀 연구를 한다는 스타일이 아니라, 한국연구가 개방된 중요한 결집체로 존재하고 싶습니다. 다행히 저희 교내에는 지금까지의 역사적·지리적 관계상 한국연구 및 한국과의 학술교류의 전문가들이 많이 있습니다. 교내에서 네트워크를 만들어, 교 내 교외, 그리고 한국과의 학술교류의 네트워크를 구축하고 싶습니다.

둘째, 일·한의 학술교류로서는, 공동연구와 연구자의 교류를 통해서, 한국으로부터의 정보는 물론이거니와, 일본에서 한국으로의 피드백(feedback)역할도 충분히 다하고 싶습니다. 특히, 본 센터는 한국국재교류재단의 지원을 받아 각양각색의 프로그램이 가능하게 됩니다. 그러므로, 본 센터는 한국 사람들에게도 납득이 가는 연구내용을 제시해 가야 한다고 생각합니다. 진정한 의미로 현해탄을 넘나드는 「知의 공동작업」이 가능해졌으면 합니다.

셋째, 젊은 세대의 새로운 일한관계를 정립하기 위해서, 본 센터에서는 연구센터의 「연구」라고 하는 이미지에 구애받지 않고, 학생·교직원·시민에게로 일한양국의 학술·문화·스포츠 등의 정보도 끊임없이 많이 제공하고 싶습니다(본 센터의 1층 부분은, 그와 같은 교류의 장입니다).그 중에서, 한국의 김 종필(金鍾泌)전 국무총리가 1998년 11월 저희 학교에서의 강연에서 강조하신 대로, 새로운 시대를 담당할 새로운 세대가 육성되기를 확신합니다.

끝으로, 일한관계 뿐만 아니라, 일한관계를 아시아의 중심에 위치를 구축하고, 인문·사회·자연과학을 종합한 한국연구, 나아가서는 아시아학의 구축도 지향하고 싶습니다.

비록 꿈은 원대하지만, 출발한지 얼마 되지 않은 센터입니다. 지금까지 이상의 지도·지원의 부탁말씀을 올리며, 저의 인사로 대신하겠습니다.

九州大学韓国研究センター長
教授
石川　捷治

九州大学韓国研究センターの建物は、新キャンパスの移転前であり、本格的な建物が建てられないという事情もあって、2階建ての小さいものです。しかし、建物は小さくとも、夢は大きく、本センターは新しい時代の研究センターを目指したいと考えています。

第1に、次世代の研究センターとして、研究員が研究室に閉じこもって研究をするというスタイルではなく、韓国研究の開かれたネットワークの結節点でありたいと思っております。幸い学内には、これまでの歴史的・地理的関係から韓国研究及び韓国との学術交流の専門家がたくさんおられます。学内でネットワークを作り、学内と、学外、そして韓国との学術交流のネットワークを作り上げたいと考えております。

第2に、日韓の学術交流では、共同研究や人の交流を通して、韓国からの情報はもちろんですが、日本から韓国へのフィードバックも充分に果たしたいと思います。とくに、本センターは韓国国際交流財団のご支援をいただき、様々なプログラムが可能となっております。そうであるからこそ、本センターは韓国の人々にとっても納得のいく研究内容を示していかなければならないと思っております。本当の意味で、玄界灘をまたぐ「知の共同作業」ができるようになりたいと考えております。

第3に、若い世代の新しい日韓関係を作るために、本センターでは、研究センターの「研究」というイメージにとらわれず、学生・教職員・市民へ、日韓両国の学術・文化・スポーツ等の情報も、どしどし提供したいと考えています（センターの1階部分は、そのような交流の場です）。その中から韓国の金鍾泌前国務総理が1998年11月の本学での講演において強調された通り、新しい時代を担う新しい世代が育ってくると確信しています。

また、日韓関係だけでなく、日韓関係をアジアの中に位置づけ、人文・社会・自然科学を総合した韓国研究、さらには、そこからアジア学の構築も目指したいと思っております。

夢は大きくとも、なにぶん出発したばかりのセンターです。これまで以上のご指導・ご支援をお願い申し上げまして、私の挨拶とさせていただきます。

日本最初の韓国研究の拠点、オープン！
九州からアジア、世界へ

◎日韓交流の促進　◎日韓海峡圏の諸問題　◎朝鮮半島の緊急課題

1階のラウンジ（談話室）は、韓国に興味を抱く九州大学の教職員、学生、留学生、九州大学で研究を行う外国人研究者等が気楽に立ち寄って韓国関係の雑誌の閲覧や懇談などのための交流スペースです。常時、コンピューター検索や韓国関係のビデオ鑑賞等で利用されています。 蔵書・ビデオ等利用希望の方は、1階入り口横の受付へお申し出ください。

▲ラウンジ
常時学生がコンピューター検索等で利用している。

1階平面図

2階平面図

2階には研究者交流室（会議室）と講師室があります。韓国関係書籍・ビデオなどが常備されており、韓国からの訪問研究員等の研究室や韓国研究等のための各種会議の開催に活用できます。

▲会議室
各種の会合に利用されている。

▲講師室
九州大学に訪問研究員として在籍している韓国人研究者の研究室として使用することにしており、学内公募を行って利用者の調整を行っている。

開所式

平成12年（2000年）1月19日（水）
「九州大学韓国研究センター」の開所式が行われました

韓国研究センターに隣接する国際ホールで行われた開所記念式典には、来賓、部局長など九大の関係者、韓国からの留学生や学生交流で韓国に留学した九大生など約120名が参列しました。杉岡総長の式辞に続いて、金鍾泌前韓国国務総理と日韓協力委員会の中曽根康弘（元内閣総理大臣）委員長の祝辞を石川韓国研究センター長が代読。文部省国際学術課の加藤幹彦課長補佐、韓国国際交流財団の金在珪（Kim　Jae-Kyu）理事の祝辞、長澤福岡県副知事による麻生福岡県知事の祝辞の代読、山崎福岡市長の祝辞と続きました。

式典に続いて、金理事、徐賢燮駐福岡大韓民国総領事館総領事、崔虎鎮在韓国九州大学同窓会顧問（前会長）、加藤課長補佐、杉岡総長、石川センター長らが、韓国研究センター前でテープカットを行いました。さらに、センター内に掲げられた金前総理の筆による「九州大学韓国研究センター」と書かれた木製の扁額の除幕を、金理事と杉岡総長が行いました。

■開所式で挨拶するKorea Foundation　金 在珪 理事

Newspaper Clipping

2000.01.20（西日本新聞）

韓国研究センターの開所式でテープカットする関係者

日韓の学術交流拠点

韓国研究センター完成
九大で開所式

2000.03（西日本新聞）

九州は日韓交流の拠点

韓国・金首相 本紙に表明
九大の研究機関に期待
関係、一層密に

北朝鮮との対話推進

1999.07.02（西日本新聞）

九大に「韓国研究」拠点
人材交流や共同研究へ

2000.01.20（読売新聞）

九大の韓国研究センター開所式

1999.06.23（日経新聞）

九大に韓国研究施設
国立大初 年内に

九大に韓国研究拠点
年数千万円 政府系機関が助成
来月協定書調印へ

協定書に調印

1999.06.16（西日本新聞）

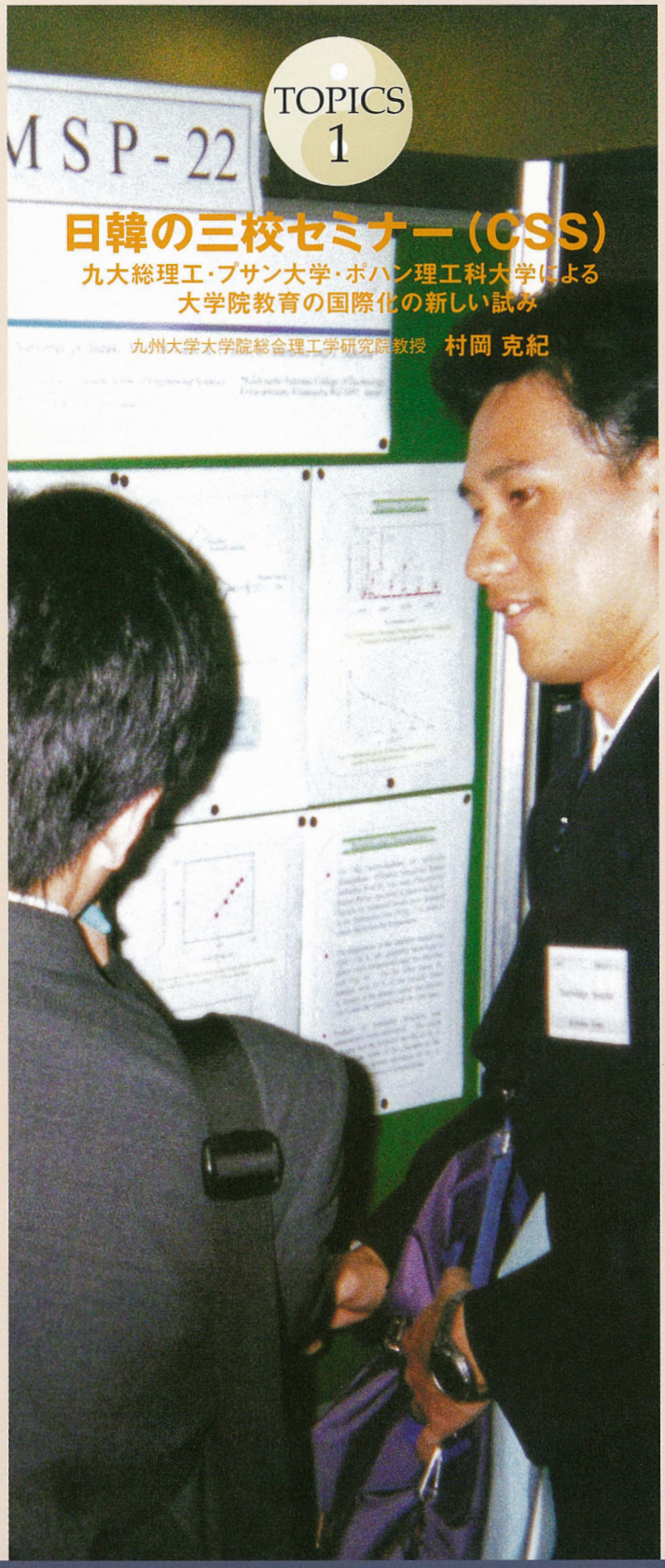
九大に韓国研究センター設置へ

韓国財団から
九大に助成金
5年で1100万ドル

1999.06.23（朝日新聞）

九大に韓国研究センター

2000.01.20（毎日新聞）



TOPICS 1

日韓の三校セミナー（CSS）

九大総理工・プサン大学・ポハン理工科大学による大学院教育の国際化の新しい試み

九州大学大学院総合理工学研究院教授　村岡 克紀

■ポスターセッションの1こま

1.まえがき

「たった200キロ余のところに450万人の大都会があるとは知らなかった」「町の表示がハングルで、漢字はほとんどなく、英語も少なくて何の店かもわからず困った」「韓国の学生との意思疎通は、いかにブロークンでも結局英語でやらざるを得ない」「昨年福岡で街を案内して遅くまで酒を飲んだ学生と再会して、同じように歓待してもらって感激した」「酒を飲んでワアワア言っていると、韓国の学生も気分は日本の学生と変らない」「タクシー代が極端に安く、食物代はそれ程でもないというように、物価の物品による日韓の差が大きい」「釜山大学のキャンパスの素晴らしさ、交流会館の充実に目を見張った」「韓国では社会の中での大学の地位が日本より高いようだ」「我々が環境研究という時は環境モニターや予測をイメージするが、韓国では化学的な処理法の研究が主だった」「それは我々のエネルギーでもそうで、九大では核融合など新エネルギー開発を中心に考えていたが、向うはエネルギーの有効利用の意識が中心だった」…これらは、平成12年11月2、3日の間、韓国プサン大学で行われた標記シンポジウム後の学生の感想をランダムに並べたものです。これからだけでも、若い時代に異文化に接して異なる発想に触れることの大事さが見てとれます。

標記シンポジウムの構想は、平成10年4月になされた九州大学大学院総合理工学研究科（平成12年4月から大学院総合理工学府、以下総理工と略称）の再編成の理念「深、広、統」と密接に関連しています。

2.三校セミナー

2.1 経緯

総理工の「深、広、統」は、大学院で専攻する自分の専門分野については深い見識を、社会や人類のニーズを理解できる広い視野を、それらを総合して問題を発掘し、また対処法を模索することにより解決策を示す統合を、という新しい理念です。平成10年度の総理工将来計画委員会での長時間の討論ののち、「深、広、統」を研究科（その後、学府）として検証する場として、プサン大学、ポハン理工科大学に「英語による、物質、エネルギー、環境を融合した研究発表」を通じての学生交流の場を設けることを提案することになりました。この両校を選んだ理由は、それぞれ九州大学との大学間交流校、総理工との部局間交流校として長い交流実績を持つ韓国の有力校であることに加えて、地理的に近くて100人単位での往来が容易であることも大きな因子でした。

平成11年2月に上記趣旨の提案の手紙を両大学学長に出したところ、3月までに合意の返事が届き、担当窓口として交流担当の副学長の紹介がありました。両副学長とのメール等での種々やりとりの後、具体案を詰めるため同年6月3、4日に両

■プサン大学パク総長のあいさつ

■三校のCSS2実行委員会幹事

氏が総理工に来学されました。それ迄には総理工の中にこれに対応するための「連携推進委員会」が設置されており、両氏と同委員会の協議により次項に示す枠組みが決められました。

2.2 三校セミナーの枠組み

(1)発表内容を、物質、エネルギー、環境の三種に大分けすること。
(2)学生の発表をオーラルとポスターの二種類とすること。
(3)教官による物質、エネルギー、環境に関するトピックス的な講演を入れることとし、三大学が一つの分野を担当すること。またその担当分野はローテーションさせること。
(4)費用は旅費、滞在費は各参加者が負担し、シンポジウム開催にかかわる費用(論文集刊行、レセプション、送迎等)は開催大学が負担すること。ただし宿舎等は開催大学が予約等についてなるべく配慮し、参加者の負担を軽くするよう努力すること。
(5)本シンポジウムの名称は九州と対馬、対馬と韓国の間の二つの海峡をはさんで友好を深めるとの意をこめてCross Straits Symposium on Materials, Energy and Environmental Sciences (CSS)と呼ぶこと。

2.3 第1回セミナー(平成11年11月1、2日)

第1回は、発案した九大総理工で行うことになりました。初日はフェリーで到着するプサン大学、ポハン理工科大学からの参加者約80名を博多埠頭に迎えるところから始まり、登録手つづき、シンポジウム、レセプション、総理工の研究施設見学、それら終了後の総理工学生による市内案内などを予定通りこなし、11月3日に再度埠頭に送る頃には、三大学の学生は非常にうち解け、言葉の壁を乗り越えて大きな友情が育ったように見えました。総理工からの参加者は学生80名、教官30名程度でした。

その後、三大学とも反省会を開き、次回へ向けての改善点などを出し合いましたが、それらは次の通りです。
(i)日程、論文集はじめ、シンポジウムの運営の大枠は今回のパターンで無理がなくて、良い。
(ii)「物質」「エネルギー」「環境」というくくりでオーラルセッションを組んだが、内容が多岐にわたりすぎてお互いの接点が少なく、有効な質疑応答が生れにくかった。それぞれについてもっとテーマを絞るのが良いのではないか。むしろ、これからはそのような分類を越えた交流(総理工の理念である「物質」「エネルギー」「環境」の融合!)に進むような配慮が必要ではないか。
(iii)レセプション、実験室案内、学生のみの懇談会、市内観光を通じての学生の案内は交流を深めるために極めて有効であったので、これは是非次回以降継続するのが良い。
(iv)技術的な点では、フェリーでの旅行は参加者の疲労が大きいので、改善した方が良い。

2.4 第2回セミナー(平成12年11月2、3日)

当初の計画では2回以降はメール、ファックス、電話のみでの意見交換によりプログラム構成などできるのではないかと考えていました。しかし第1回の反省点を踏まえての改善を行い、より意義深いシンポジウムとするため、6月3、4日に主催校のプサン大学に九大総理工とポハン理工科大学からそれぞれの幹事が各2〜3名づつ集まって方針を審議しました。

参加者数は総理工から学生46名、教官12名、ポハン理工科大学から合計30名程度、プサン大学から合計70〜80名程度でした。

2.5 今後の予定

第3回セミナーは2001年(平成13年)11月15、16日にポハン理工科大学で行うことになっており、これで三大学間を一巡することになります。第2回の反省点が多数ありましたので、準備会合を開くことになるかも知れません。その際、第2回セミナー後の総理工教官(10名)学生幹事(6名)の反省会で学生から出された「企画段階から学生も参加したい」を前向きにとらえ、是非実現したいと思っています。

3.あとがき

第2回のこぼれ話をご紹介します。11月1日の訪韓は第1回の反省〔2.3節の(iv)〕からJR九州のビートル(所要3時間足らず)で行くことにしていました。ところが当日は季節外れの台風がやってきて、出発(10時15分)間際になってキャンセルされました。8時15分発で出発していた2人も対馬直前で折り返して戻ってきてしまいました。Cross Straitsの難しさを実感する皮肉な破目になり、もし行けないことになるとそれ迄の努力が水泡に帰する、と青くなってかけまわった結果、日航のプサン行きに席があることがわかって急遽バスを仕立てて福岡空港へ移動して、同夕にはプサン大学に着いて、ことなきを得ました。この間の学生幹事のねばりは相当なもので、一緒に旅行社、JR九州の人とかけ合いながら頼もしいと思ったことでした。そのため余分の出費を余儀なくされたのは致し方ないところですが、あのような状況の下で対応できたというのはまた別の収穫でしょう。

1.のまえがきに示した学生諸君の言葉から、本シンポジウムの総理工の教育プログラムの一環としての当初の目的は達せられつつあると判断されます。これからこのシンポジウムがどう育っていくかは三大学の教官、学生の叡智によっています。

■教官によるプレナリー発表の例(ポハン理工科大学ヘオ教授)

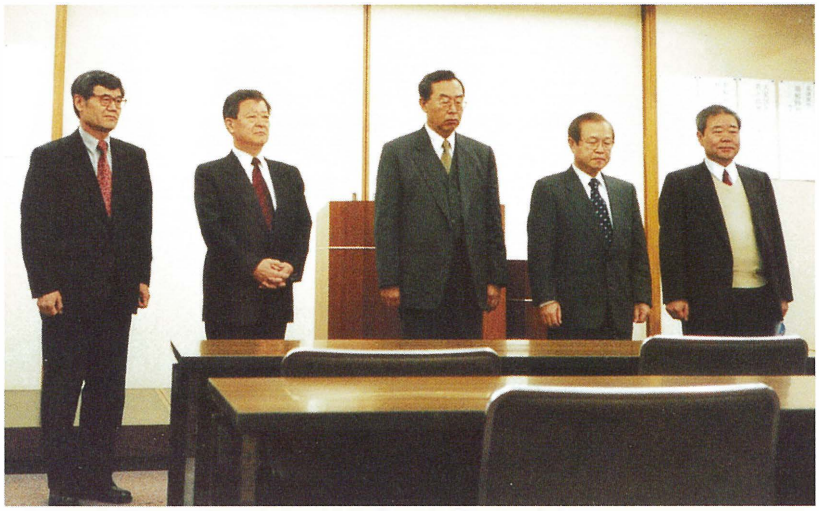
■レセプション風景

■帰国後九大の参加教官と学生実行委員の反省会の折

TOPICS 2

日韓シンポジウム「韓国伝統文化と九州」

九州大学大学院人文科学研究院助教授　六反田 豊



■韓国からの招聘者紹介（右から、李成茂氏、安輝濬氏、崔柄憲氏、李楠永氏、李秉根氏）

昨年12月10日、九州大学国際ホールにおいて、韓国研究センター・大学院人文科学研究院主催、韓国国際交流財団共催による日韓シンポジウム「韓国伝統文化と九州」が開催された。九州は韓国ともっとも近く、それゆえ古くから韓国との間で密接な交流が展開してきた地域である。さらに、そうした地理的・文化的状況もあって、九大では朝鮮史学をはじめとする人文科学研究院の諸講座において韓国研究が活発に進められており、また韓国の大学・研究機関等との学術交流も盛んである。今回のシンポジウムは、日韓間の文化交流に占める九州の位置を念頭におきながら、古代から近世に至る日韓文化交流史に内在する諸問題を歴史学、美術史学、韓国儒学、国語学といった人文科学の各分野にわたって展望し、21世紀における日韓の文化・学術交流の進展をはかり、さらには、九大の人文科学分野における韓国研究の現在地点を確認して今後の方向性を探ることを大きな目的とした。そのために、パネリストとして韓国から国史編纂委員会委員長の李成茂氏とソウル大学校人文大学の教授4人をお招きし、一方、九大側からも各分野において韓国研究の豊富な実績をもつ3人の教授に出席いただいた。

シンポジウムは、冒頭の杉岡洋一・九大総長による挨拶のあと、まず李成茂氏の「朝鮮時代の両班社会」と題する基調講演から始まった。「両班（ヤンバン）」は、韓国の伝統社会・文化を読み解くための重要なキーワードの1つである。中世・近世の日本が地方分権的な武人中心の社会を形成したのとは対照的に、同時期の韓国では、朝鮮王朝によって文治主義に基づく中央集権国家が建設された。そして、そのような文治主義を体現したのが、両班と称される支配階層の人々だった。李氏は、本来は文武官僚の総称にすぎなかった「両班」の語が、朝鮮時代になって官僚を輩出する支配階層の呼称となるに至る過程、両班の官職や諸特権・軍役・土地所有などの問題、17世紀以降の社会変動と両班の動向などについて、ときにユーモアを交えながら講演された。

続いて各パネリストによる研究報告に移り、①仏教と美術の交流②韓国儒学と西日本の儒学者③韓国語と日本語の交流、という3つのサブ・テーマにそって研究成果が紹介された。①では、まず崔柄憲氏（ソウル大教授）が、韓国天台宗の開祖義天の思想と活動を踏まえて、韓国と日本の天台宗のあり方を比較され、次に安輝濬氏（同）が、室町期における李秀文や文清の活躍、江戸期における通信使随行画員の役割などに注目しつつ、朝鮮時代の絵画が日本にあたえた影響について実例を示しながら明らかにされた。また菊竹淳一氏（九大教授）は、高麗仏や朝鮮時代の地蔵十王図が西日本地方に偏在しているという事実から、それらが対外交易や海運の守護仏として信仰の対象とされていた可能性を示唆された。②では、まず李楠永氏（ソウル大教授）が、朴斉家と丁若鏞の思想を比較検討して朝鮮時代後期における儒学の二重性という問題を提起され、次に福田殖氏（九大名誉教授・久留米大教授）が、李退渓の大成した朝鮮朱子学が九州の儒者にどのような影響をあたえたかという問題を、熊本実学派の大塚退野、平戸藩の崎門学者楠本碩水を例にあげて検討された。③では、まず迫野虔徳氏（九大教授）が、18世紀末に韓国で作られた『倭語類解』に九州方言と思しき多数の日本語語彙が見出されるという点から同書の成立に関する通説に疑問を提示し、朝鮮における各種語学書の成立過程を明らかにするうえで九州方言が重要な手がかりを与えてくれることを指摘された。一方、李秉根氏（ソウル大教授）は、韓国で開化期に受容された日本漢字語が現在の韓国語においてどのように使用されているかを、『大韓民報』（1909.6—10.8）連載の「新来成語」に出てくる日本漢字語を中心に検討された。

以上の基調講演と研究報告を受けて行われた総合討論では、韓国伝統文化の特質は何か、それは九州をはじめとする日本の伝統文化といかに関わっているのか、といった点を中心にして、フロアーからの質疑も含めて予定の時間を大幅に超過する活発な討論・意見交換がなされた。

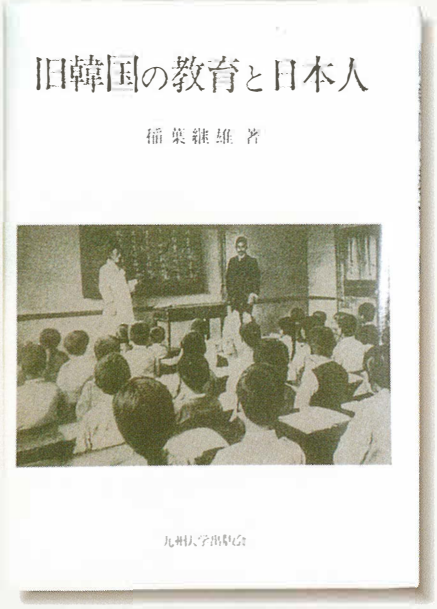
一口に文化交流といっても、その内容は多岐にわたる。それだけに、各分野の研究成果を持ち寄って、日韓双方の視点からこれを検証しあう作業はきわめて重要である。本シンポジウムの開催がそうした端緒となったとすれば、主催者側の一員としてこれにまさる喜びはない。ご協力いただいた各位に御礼申し上げるとともに、日韓両国における文化交流史研究がいっそう進展し、両国間の学術レヴェルでの交流がさらに深まることを心より祈念するものである。

■総合討論の風景（質問者は梅田博之麗澤大学教授、右端に平木實天理大学教授も見える）

『旧韓国の教育と日本人』

（九州大学出版会 1999年10月）

稲葉 継雄著



本書は、日本に併合される以前の「旧韓国」（時期区分上の用語では「旧韓末」）の教育について筆者がこれまでに書き溜めてきた拙稿11編を集成したものである。しかし、各篇（本書における各章）相互間の連関を考慮して一部添削・再編し、論文発表後に得た新たな知見に基づいて誤りは訂正したという意味において、既発表論文の単なる再録ではない。

本書は、大きく4つの部分から成る。

第Ⅰ部は、朝鮮教育史上近代のエポックとなった甲午改革（1894～6年）から日韓併合（1910年）に至る旧韓末教育史の概説であるが、平板な制度史的概説ではなく、日本人の関与をキー・ポイントとして旧韓末教育の構造と、そこにおける日韓双方のダイナミズム、すなわち日本側の干渉と韓国側の主体性との緊張関係を明らかにするよう努めた。

第Ⅱ部では、政治家3名を取り上げた。井上角五郎は、いわば福沢諭吉の代理人として活動した人物である。伊藤博文は、いうまでもなく初代統監として日本の保護国時代の韓国を統治し、伊藤の政治的ライバルたる大隈重信にも、旧韓国に関する多くの言動があった。ここでは、彼らと旧韓国の教育との関係を改めて浮き彫りにした。

第Ⅲ部は、旧韓国の「お雇い外国人」としての幣原坦・三土忠造・その他学務官僚の事例研究である。彼らが、身分上は韓国政府に雇われた身でありながら、結果的に日本による植民地教育への地ならしをしていった過程を実証した。

第Ⅳ部は、いわゆる「日語学校」と官公立普通学校の現場にあった日本人教師たちの動きを追跡したものである。「日語学校」と普通学校とでは学校の基本的性格が異なるが、そこにおける日本人教師の「国策の尖兵」的性格は共通であった。第Ⅳ部では、彼ら個々人の動向の中から最大公約数的日本人教師像を抽出しようとした。

以上のような4部11章の論究によってすべてをカバーできるわけでは勿論ないが、政治家・学務官僚そして教師という多面的な角度から接近することによって、旧韓国の教育への日本人の関与、直截にいえば併合後の同化教育へ向けての準備工作をほぼトータルに把握できるのではないかと思う。併合後に比べてまだ未解明の部分が多い旧韓末教育史の研究に、本書が一助となれば幸いである。

なお、本書第Ⅳ部の続編として現在、『旧韓国～朝鮮の日本人教員』を執筆中で、2001年度内に刊行の予定である。これは、出身地と出身校の視角から、旧韓国～植民地朝鮮における日本人教員の実像にアプローチするものである。乞御期待。

目次（抜粋）

Ⅰ 概説
第1章 甲午改革期の朝鮮教育と日本
第2章 韓末教育の構造 ――言語教育を中心として――
Ⅱ 政治家関係
第3章 井上角五郎と『漢城旬報』『漢城周報』 ――ハングル採用問題を中心に――
第4章 統監伊藤博文と韓国教育
第5章 大隈重信と旧韓国・朝鮮の教育
Ⅲ 学務官僚関係
第6章 旧韓国の教育行政と日本人の役割 ――学政参与官幣原坦を中心として――
第7章 三土忠造と韓国教育
第8章 旧韓国雇聘日本人「学部職員」のその後 ――1909年7月～1916年10月の動向――
Ⅳ 「日語学校」・官公立普通学校教師関係
第9章 旧韓末「日語学校」の日本人教師 ――その代表的事例――
第10章 旧韓国官公立普通学校の日本人教員 ――教員人事を中心として――
第11章 旧韓国官公立普通学校の日本人教員 ――教育活動を中心として――

PROFILE

〈著者略歴〉
稲葉継雄（いなば・つぎお）
1947年佐賀県生まれ。1970年九州大学教育学部卒業。1973年九州大学大学院教育学研究科修士課程修了。1974年韓国・高麗大学校大学院教育学科博士課程中退。筑波大学文芸・言語学系講師～助教授、九州大学教育学部助教授～教授を経て、現在、九州大学大学院人間環境学研究院教授、博士（教育学）。主著／『解放後韓国の教育改革』（共著・韓国文・韓国研究院）、『旧韓末「日語学校」の研究』（九州大学出版会）など。

韓国研究センター活動及び利用記録

（2000年1月～2001年2月）

時期		事項
2000年	1月	韓国研究センター委員会（第1回） 韓国若手ジャーナリスト招聘事業 韓国東亜日報　趙　憲注　記者受入（受入部局:法学研究院） 韓国研究センター開所式 Korea Foundationからの出席者 交流理事　金　在珪 崔　玄洙 その他の学外出席者 文部省国際学術課　課長補佐　加藤　幹彦 福岡県副知事　長澤　純一 福岡市長　山崎広太郎 駐福岡大韓民国総領事館　総領事　徐　賢燮 在福岡オーストラリア領事館　内田　由子 福岡県日韓親善協会　会長　石井　幸孝 福岡韓国商工会議所　会長　金　信夫 事務局長　兼友　誠二 ㈱西日本新聞社　編集局長　玉川　孝道 福岡県社会福祉協議会　常務理事　大藪　和子 福岡市　国際部長　村上　廣志 (財)福岡県国際交流センター　専務理事　藤本　英夫 (財)アジア太平洋センター　理事長　権藤與志夫 (財)福岡国際交流協会　事務局長　宮崎　信輔 (社)九州・山口経済連合会　常務理事　長友　泰明
	2月	全北大学校総長、国際交流部長他2名　視察 釜山大学校関係者（2名）　視察
	3月	韓国研究センター委員会（第2回） NHKラジオ第一放送　特集「日韓はパートナーになれるか　～九州・韓国の交流から日韓新時代を展望する～」韓国研究センターをスタジオとして全国放送
	4月	韓国研究センター委員会（第3回） 第14回九州大学朝鮮学研究会例会 留学生のための現代日本社会研究を目的とする研究会（法学研究院）（～7月初）
	5月	韓国研究センター委員会（第4回） 第15回九州大学朝鮮学研究会例会 韓国語教授法研究に係る研修（経済学研究院）（～7月初）
	6月	外務省武藤審議官　視察
	7月	釜山大学校関係者（15名）　視察 全北大学校関係者（8名）　視察 昌原大学校関係者（30名）　視察 韓国青少年訪問団　視察 鮮文大学関係者　視察 啓明大学校関係者　視察 光州保健大学電算情報処理科　朴　敬雨教授他4名　視察 釜山大学校商科大学長 崔 相文教授、同副学長 金 昌浩教授　視察 光州保健大学電算情報処理科教授（5名）との研究交流会（システム情報科学研究院） 高校生多数（オープンキャンパス時の見学）来館
	8月	梨花女子大学校にて韓国語学研修（8月7日～30日） 釜山大学校教職員　視察 オックスフォード大学教職員　視察 国際交流基金日韓文化交流連絡室　大森氏　視察
2000年	9月	昌原大学校教職員　視察 韓国教育大学校研修団（22名）　視察 第16回九州大学朝鮮学研究会例会（人文科学研究院）
	10月	韓国研究センター委員会（第5回） 梨花女子大学校関係者　視察 慶尚大学校病院研修団　視察 韓国国際交流財団助成事業による招聘研究者　崔　相文教授による経済学演習（経済学研究院）（～11月初） アジア家禽学シンポジウム及び西日本畜産研究会出席者打ち合わせ（農学研究院） 日韓共同理工系学部留学生の日本語予備教育（留学生センター）（～3月）
	11月	韓国研究センター委員会（第6回） 釜山発展研究院関係者　視察 第17回九州大学朝鮮学研究会例会（人文科学研究院） 言語文化科目Ⅱ「朝鮮半島の言語と文化」講義（言語文化研究院）（～1月） 日韓のジェンダー問題に関する勉強会（人間環境学府社会思想史研究室）（～3月） 九大祭行事「学生YMCA日韓交流プログラムの足跡（写真・説明）」展示
	12月	韓国研究センター専門委員会 韓国国土研究院関係者（2名）　視察 中国人民大学関係者　視察 韓国国史編纂委員会　李　成茂　委員長夫妻、 ソウル大学校　李　秉根　教授他3名　視察 日本学術振興会日韓科学協力事業共同研究「韓半島と九州島との間の縁海下のマントルダイアピル」に関する研究発表会（理学研究院）
2001年	1月	徐賢燮　駐福岡大韓民国総領事への感謝状贈呈式及び記念講演会 亜洲大学校　国際大学　鄭　鍾旭教授（元大統領外交安保主席秘書官、駐中国特命全権大使）　講演会 （比較社会文化研究院主催、韓国研究センター協賛） 韓国研究センター専門委員会 韓国地域大学育成事業団長協議会（13名）　視察 釜山大学校国際交流課長　Kun-Young Park 教授他1名　視察 日韓共同理工系学部留学生のための日本事情講義（留学生センター） 韓国研究センター委員会（第7回・書面回議） 高神大学校関係者　視察
	2月	韓国研究センター委員会（第8回） 韓国研究センター専門委員会 NHKテレビ「九州沖縄一本勝負」で韓国研究センターを紹介 韓国国際交流財団　李　仁浩　理事長、 洪性和駐福岡大韓民国総領事、同　李南教教育担当領事　視察

「韓国研究センター」に寄贈された韓国研究図書リスト

（1999年度～2000年度）

＜1999年度＞

韓国語辞書

●『延世韓国語辞典』〔2册〕
●『韓国漢字語辞典』全4巻
檀国大学校東洋学研究所編
●『民衆書林漢韓大字典』〔2册〕
●『우리말 語源辞典』金敏洙編著
●『韓国文化象徴辞典』東亜出版社
●『現代活用玉篇』東亜出版社〔5册〕
●『NEW ACE日韓字典』
金星教科書出版〔5册〕
●『NEW ACE韓日字典』
金星教科書出版〔5册〕
●『韓国書誌学辞典』
제웅규編著 景仁文化社
●『韓国地名辞書』
손성우編著 景仁文化社
●『韓国語発音大辞典』韓国放送公社

韓国語教材

●『韓国語 KOREAN』1～4
서울大学校語学研究所〔5세트〕
●『한국어』1～3
연세대학교 한국어학당〔5세트〕

事 典

●『国史大事典』李弘稙編
●『韓国人名大事典』新丘文化社
●『韓国服飾文化事典』金英淑編著
●『韓国近代文人大事典』
『韓国現代文人大事典』아세아문화사
●『한국민족문화대백과사전』全27巻
한국정신문화연구원
●『国楽大事典』
張師勳著 世光音楽出版社

年 鑑（近3年の 것）

●『韓国大学年鑑』上・下2巻
●『環境白書』（97、98、99年度）
●『韓国学校名鑑』（96、97年度）
●『原子力年鑑』（97、98、99年度）
●『大学研究所総覧』
（国内篇・国外篇、98年度）
●『韓国都市年鑑』（97、98年度）
●『経済白書』（98年度）

目 録

●『歴代韓国人編著書目録』
황충기 編 国学資料院
●『韓国書誌関係文献目録』
諸洪圭編著 景仁文化社
●『韓国文献目録情報』
韓国国立中央図書館

地 図

●『海東地図』全3巻
서울大学校奎章閣編
●『韓国税古地図』李燦著 범우사
●『定都600年 서울地図』
許英桓著 범우사
●『全南의 옛地図』
金 井昊編 鄕土文化振興院
●『韓国의古地図』
●『同資料編』全2册 嶺南大博物館編
●『最近北韓5万分之1地形図』全2册
景仁文化社編

（以下淵 中央地図社製地図）
●「大東輿地全図」
●「韓国道路地図」
●「大韓民国全図」（漢字版）
●「大韓民国全図」（한글版）
●「世界大地図」（한글版）
●「釜山市観光地図」

歴史・民俗・文化

●『韓国典籍印刷史』千惠鳳著 범우사
●『韓国税美』全24巻 中央日報社
●「빛깔있는 책들」대원사 全183巻
●『사진으로 보는 独立運動』上・下
辞庚雁
●『한국사』全27巻 廃掩紫
●『韓国仏教美術大典』全7巻
●『高麗青磁』정명호編著 景仁文化社
●『李朝陶磁』정명호編著 景仁文化社
●『韓国의古宮』신영훈編著 景仁文化社
●『韓国古火器図鑑』
조인복編著 景仁文化社
●『朝鮮工芸展示会図録』全8巻
景仁文化社
●『20世紀世界와 韓国 Chronicle
1900～1999』梁東柱編著
●「韓国의古宮」①景福宮 ②③昌徳宮
④徳壽宮 ⑤宗廟 悦話堂
●『韓国巫神図』金泰坤著 悦話堂
●『韓国仮面劇』
李杜鉉著 서울大学校出版部
●『韓国의建築』
윤장섭著 서울大学校出版部
●『韓国의 배 』
金在瑾著 서울大学校出版部
●『韓国楽器大観』
張師勳著 서울大学校出版部
●『韓国의 伝統建築』
張慶浩著 文芸出版社

VHS資料

（이하는 KBS放送제작）
●「国楽의 広場—판소리春香伝」
●「宗家（종가）」
●「韓国의 伝統婚礼」
●「韓国의 이미지—韓紙」
●「韓国의 이미지 銅鑼（징）」
●「韓国의 이미지—옹기」
●「韓国百景—雪嶽山의 四季」
●「韓国百景—済州萬丈窟」
●「韓国百景—曹溪山」
●「元暁大師」全8巻
●「孟進士宅의 慶事」
●「애니메이션 韓国옛 이야기 시리즈」
①～④全4巻
●「6・25비디오 다큐멘터리（朝鮮戦争）」
全10巻
●KBS韓国映像実録
（1945、8、15～94、12）全25巻
（이하는 MBC放送제작）
●「민족의 요람—온돌」
●「흙에 스민 高麗人의 마음— 青磁」
●「뿌리의 記録—族譜」
●「歴史의 現場—城郭」
●「韓国의 美—韓国놀이」
●「韓国의 仮面」
●「테마 에세이—鬼」全3巻
●「韓国人과 호랑이」
●「韓国人의 웃음」
●「伝統舞踊」
●「正楽（雅楽）」
●「판소리」
●「民俗楽」
●「3・1다큐멘터리—그 날의 유산」
●「自由다큐멘터리—休戦線의 四季」
●「多島海의 四季」
●「白頭山」
●「大型드라마 朝鮮総督府」全5巻
●「잃어버린 이름」全3巻
●「朝鮮王朝500年」全28巻
●「겨울의 아리랑」
●「선비의 정신—서원」
●「역사의 기록—인쇄문화」
●「생활신앙의 모체—무속」
●「음양오행과 풍수지리」
●「음양오행의 조화—한의학」

＜2000年度＞

〔年鑑類・最新版〕
●保健年鑑 1999年度版全2册
●防衛年鑑 1998～99年
●報道写真年鑑 1999年（全2册）
●韓国統計年鑑（99年度）
●連合年鑑 1999年（別册・韓国人年鑑）
●韓国年鑑（99年度）
●全国統計年鑑（99年度）
●韓国経済年鑑
（別册・韓国財界人士録99年度）
●流通業体年鑑（99年度）
●産業立地要覧（99年度）
●鉄鋼年鑑（99年度）
●労働経済年鑑（99年度）
●農協年鑑（99年度）
●電気年鑑（全2册、2000年度）
●北韓年鑑（全2册、2000年度）

〔白書・1997～1999年度版〕
●労働白書（98、99年度）
●統一白書（98年度）
●国防白書（98、99年度）
●外交白書（97～99年度）
●保健福祉白書（97～99年度）
●警察白書（99年度）
●情報通信白書（97～99年度）
●女性白書（99年度）

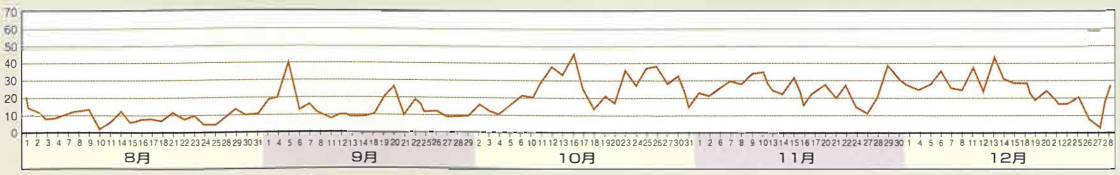
〔統計・最新版〕
●韓国主要経済指標（99年度）
●農林業主要統計（99年度）
●地域統計年報（99年度）
●農家経済統計（98年度）
●教育統計年報（99年度）
●国税統計年報（99年度）
●保健福祉統計年報
（旧・保健社会統計年報、99年度）
●女性統計年報（99年度）
●経済統計年報（99年度）
●外換統計年報（99年度）
●銀行経営統計（99年度）
●人口動態統計年報（98年度）
●海洋水産統計年報（99年度）
●林業統計年報（99年度）
●死亡原因統計年報（98年度）
●建設交通統計年報
（建設部門・交通部門、99年度）
●都市比較統計（98年度）
●서울統計年報（99年度）
●証券統計年報（98年度）
●経済活動人口年報（98年度）
●都市家計年報（98年度）
●物価年報（98年度）
●主要統計指標解説（98年度）
●한국의 사회지표（99年度）

〔報告・1997～1999年度版〕
●事業体労働実態調査報告書（98年度）
●事業体基礎統計調査報告書
（全国編、98年度）
●鉱工業統計調査報告書
（全国編・地域編・企業体編、97年度）
●産業総調査報告書
（全国編・地域編・企業体編・其他編、98年度）
●労働力需要動向調査報告書（99年度）
●農業総調査（95年度）

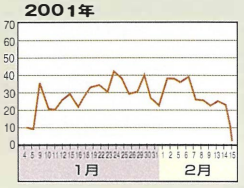
〔文化〕
●「大韓民国政府記録写真集（1）1948
～58年」
●「国会議政史」
●「우리나라의 금융제도」（韓国銀行）
●「서울건축사」（辞麓特別市）
●「租税概要」（99年度、財政経済部）

来 館 者 指 数 グ ラ フ

2000年



2001年



INFORMATION

ご投稿ください!

ニュースレターでは、できるかぎり幅広い広報を行うため、さまざまのコーナーを設け、皆様のご投稿をお待ちしています。

■Sience Reports 韓国·日韓関係にまつわる領域研究のもとでえられた具体的な研究成果を紹介するコーナーです。

■Topics 韓国研究センターが支援する各種事業の成果の報告、諸分野の研究方法や研究の背景、内外で発表された優れた研究を紹介するコーナーです。

■Discussion or Interview 座談会やインタビューで、研究者の素顔をご紹介したいと思います。

■Essay "科学者のひとりごと""研究に関して日頃思っていること""韓国との出会い"等々お寄せ下さい。

■その他 関連する学会·研究会·シンポジウムの案内、近著紹介、等につきましても掲載いたしますので、随時お知らせ下さい。

平成13年度 韓国国際交流財団による助成事業についてのお知らせ

(いずれも九州大学の学内を対象として募集いたします)

①共同研究プロジェクト助成事業
②招聘事業
③派遣事業
④日韓学術シンポジウム助成事業
⑤韓国関係図書整備事業
⑥韓国研究奨学金事業
⑦韓国語学研修

①～⑤の諸事業については、13年度の募集はすでに終了しました。14年度分は平成13年7月上旬に募集の予定です。詳細は、総務部国際交流課又は各部局担当掛にお問い合わせください。

⑥の韓国研究奨学金事業は、九州大学大学院の修士課程及び博士後期課程に在籍中又は入進学予定の日本国籍を有する学生(留学生を除く)で、人文科学又は社会科学分野において韓国研究を専攻または専攻予定である者を対象としています。詳細は、学務部厚生課または各部局担当掛にお問い合わせください。

⑦の韓国語学研修は、九州大学に在籍し、日本国籍を有する学生(留学生を除く)を対象として、韓国の大学で8月に約3週間の語学研修を実施します。募集人員は15名。4月下旬に募集の予定です。詳細は、学務部留学生課または各部局担当掛にお問い合わせください。

■最寄りの交通機関

- ●JR博多駅→地下鉄中洲川端乗換(貝塚行)→箱崎九大前下車
- ●福岡空港→地下鉄中洲川端乗換(貝塚行)→箱崎九大前下車
- ●西鉄バス10番系統→九大前下車
  西鉄バス29番系統→箱崎松原下車

センター利用案内 開館時間/10:00～17:00

九州大学韓国研究センターでは
下記のホームページURLで事業紹介も行っています。
http://www.isc.kyushu-u.ac.jp/rcks

九州大学韓国研究センター News Letter vol.1
編集発行　九州大学韓国研究センター　2001年3月20日

〒812-8581 福岡市東区箱崎6-10-1 九州大学総務部国際交流課内
TEL (092) 642-2135·2136　FAX (092) 642-4242
問い合わせ先:E-mail/syokikak@jimu.kyushu-u.ac.jp